

奈良県主要農作物奨励品種審査会 議事録

1. 日 時 令和3年9月10日（金）午前10時～11時
2. 開催方法 ZOOMによるWEB開催
3. 出席者 奈良県主要農作物奨励品種審査会構成員および構成員所属団体関係者

（審査員の構成）

国の出先機関職員（近畿農政局 地方参事官（奈良県担当））
学識経験者
生産者団体（奈良県農業協同組合）
奈良県米麦改良協会
小麦実需者代表
奈良県食と農の振興部（奈良県農業研究開発センター所長）
奈良県食と農の振興部（農業水産振興課長）

4. 審査会の概要

（司会進行） 農業水産振興課担当者

（開会挨拶） 農業水産振興課長

（座 長） 農業水産振興課長を選出

座長により議事進行

5. 議 事

○審査会の公開についての説明（農業水産振興課担当者）

・県では「審議会等の会議の公開に関する指針」を定め、審議会等の会議を原則として公開することとしており、県政の透明性の向上を図り、もって開かれた県政を推進することとしているところ。

・今回の主要農作物奨励品種審査会についても、8月25日開催の運びで、指針に基づき、県ホームページにおいて傍聴者を募っていた。

・しかしながら、今回、新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴い、延期し、WEB開催としたことから、公開については見合わせ、終了後にすみやかに、県ホームページにおいて議事録を公表することで対応する。

○「はるみずき」の来歴、系譜、品種特性、奨励品種に採用しようとする理由、試験および検討経過、適応地帯、栽培上の留意点について

（奈良県農業研究開発センター担当研究員）

・資料に基づき説明

・「はるみずき」は、稈長、穂長とも「ふくはるか」に比べてやや長い（表1）。収量は「ふくはるか」に比べて3%程度多収。原麦のタンパク質含有率は「ふくはるか」に比べて1.2%高い。

・「はるみずき」は、「ふくはるか」に比べて出穂期は4日～6日早い成熟期にはほ

とんど差がない(表2)。早播きすると標準播きに比べて収量は51%となり、千粒重や容積重も低下した。低温条件で花粉の稔性が低下し、結実せず腐敗したものと推察している。

・ミリングスコアについては、「ふくはるか」よりやや低い(表3)。「ふくはるか」は硬質のため篩抜けがよく製粉しやすいことが特長であった。ただし問題となるような低さではない。

・バリメーターバリューは、生地の物性であり、薄力粉では0に近いほど、強力粉では100に近いのが理想。「はるみずき」は「ふくはるか」の倍の数値であり、はるかに生地の物性が強い。

・製パン適性の総合評価は1CWと同等もしくはやや高い。「はるみずき」はふくらみがよい。

・倒伏については、2020年の田原本町現地試験で発生しているが、土が膨軟で生育が良すぎて株が浮き上がって発生したもので例外的(表5)。赤かび病は「ふくはるか」でわずかに発生したが「はるみずき」では発生していない。現地試験の原麦タンパク質含有率は、2020年の五條市のみ「ふくはるか」に比べて低いが、その他は全て「ふくはるか」を上回っている。

・タンパク質含有率は12%を目標としたい。

・播種期は11月10日を早限とし、11月15日～25日を適期とする。

○おもな質疑応答

(質問) 大分県では奨励品種に採用されたのか?(A委員)

(回答) 醤油を用途として既に採用されている。(農業研究開発センター担当研究員)

(質問) 近隣の府県での採用の見込みはどうか?(A委員)

(回答) 興味を持って奨励品種決定試験に供試しようとしている県はあるが、まだ採用するかどうかは分からない。(農業研究開発センター担当研究員)

(質問) 「はるみずき」の普及に向けたスケジュールは?(B委員)

(回答) 後ほど、詳しく説明するが、種子確保のためR4年産(R3年秋播き)に原種を栽培し、R5年産(R4年秋播き)でR4年産原種を用いて一般採種圃で種子を栽培、R6年産(R5年秋播き)で生産者に種子を供給して「はるみずき」に全面切り替え予定。(農業水産振興課担当者)

(質問) 開花期追肥の具体的な窒素分量は?(A委員)

(回答) 4kg/10aでは少なすぎる。タンパク質含有率12%以上とするためには8kg/10a。出穂から開花までの期間が長いので、出穂10日後の追肥では早すぎる。効果的に行うのであれば開花期をきっちり狙う必要がある。生産者には追肥の適期の写真等を提示して、目で見てもらって指導するとよいと思う。(農業研究開発センター担当研究員)

(提言) 新品種への切り替わりのタイミングで指導するのがよいと思う。(A委員)

○座長より全ての審査員に口頭確認したところ奨励品種採用についての異議はなかったため、小麦品種「はるみずき」を奨励品種として採用することに決定。

6. その他

○「はるみずき」の今後の普及に向けた対応、ならびに、現行奨励品種「ふくはるか」の今後の扱いについて説明(農業水産振興課担当者)

・種子確保のため、R4年産(R3年秋播き)で原種12aを栽培、R5年産(R4年秋播き)でR4年産原種を用いて一般採種圃350aを栽培、R6年産(R5年秋播き)

でR5年産一般採種種子を用いて県下全域で「はるみずき」に切り替えて行きたい。
・現行小麦奨励品種「ふくはるか」については、種子供給体制が完全に整うまでの期間として、今後2年間をめどに奨励品種として存続し、その後、令和5年の秋をめどに、廃止を検討したい。

○その他

（質問）早播きすると霜害につながるとのことだったが、もう一度教えて欲しい（B委員）

（回答）11月10日より早い播種は危険。11月15日～25日に播種する。幅を持たせているのは、集落営農等、大面積の場合に日数がかかるため。（農業研究開発センター担当研究員）

（要望・提言）過去の気象データ10年分程度を元に、開花期の低温積算により凍霜害遭遇確率を示せば良いと思う。また、播種量と穂数の関係。さらに、播種深度と分けつ数の関係についても調査してみてはどうか。（A委員）